

ジャイカが新しく生まれ変わります。

2008年10月、JICAは、技術協力、有償資金協力、無償資金協力を三元的に担う新しい援助機関として生まれ変わります。このコーナーでは、新JICAの事業や体制を分かりやすく解説します。

体系的・長期的思考への転換

開発研究所の設立は、新JICA発足の目玉の一つだ。JICAの国際協力総合研修所（調査研究部門）と、国際協力銀行（JBIC）の開発金融研究所（経済協力部門）が統合される。

研究所の使命は、第一に、「開発」を経済・政治・社会・経営・行政など多角的視点でとらえ、世界の開発課題に対する知的貢献を果たすこと。もう一つは、50年以上にわたる日本の援助経験と蓄積されたデータの体系化を通じて、事業の意義や開発への貢献を理論的枠組みの中で実証し、その向上に役立てること。

「使命を果たすためには、個々のプロジェクトをマネジメントする個別的・短期的な思考から、過去と将来の援助を考慮した体系的・長期的な思考への転換が必要。緒方貞子理事長もその点を強調しています。それが結果として事業効果の拡大につ

IとIIの研究領域だ。

一方、IIIとIVは援助の在り方の検討が主要の研究テーマとなる。IIIでは、「気候変動の悪影響を受けやすいのは、貧しい国の貧しい人」という認識から、途上国の経済成長と低炭素社会の両立に向けた提言をまとめることなどが検討されている。さらにIVは、JICAの事業戦略に焦点を当てる。50年来実施してきた援助がその国の経済や社会にどれほど貢献したかを、幅広い観点から見直していくのがポイントだ。

開発をリードする研究拠点へ

研究は基本的に、職員、国際協力専門員、研究員として入ってもらう外部の研究者の3者がチームを組んで行う。

また、研究成果はJICA関係者をはじめ、途上国の政府関係者やほかの援助機関、日本の市民社会にも積極的に発信していく。論文や書籍にまとめるほか、ターゲット層に応じて発信方法を振り分ける考えだ。

新JICAの組織全体を巻き込んだ研究能力・発信力の強化により、開発の世界潮流をリードできる研究拠点への成長が期待されている。

JICA事業の企画・実施・評価に関するアドバイザーとしての国内業務と、企画調査員や派遣専門家などとしての海外業務を担う。

研究テーマ(問題意識)の一例

I 平和と開発	II 成長と貧困削減	III 気候変動	IV 援助戦略
紛争の予防と管理	アフリカの成長持続のための戦略	途上国開発と低炭素社会実現の両立	援助の「有効性」の検証
紛争影響国における国家建設	日本と東アジアの成長経験	途上国に対する気候変動の悪影響の極小化	援助に関する将来展望
イスラムと開発	インフラ開発を通じた成長と貧困削減		「知的インフラ」の整備
非伝統的安全保障とアセアン統合			

LESSON 04

開発研究所を開設

世界最大規模の援助実施機関となる新JICAは、開発研究所を新設する。研究所の骨格となる使命、研究テーマ、実施体制などについて、加藤宏・開発研究所準備室長に聞いた。

ながら、開発をめぐる世界的な議論の場に一石を投じるものになれば」と開発研究所準備室長の加藤宏さんは期待する。

4つの研究領域を柱に

検討している研究領域は、「I 平和と開発」「II 成長と貧困削減」「III 気候変動」「IV 援助戦略」の4つ。具体的な研究テーマとして、Iでは「開発は紛争を防げるのか」との問題意識から、武力紛争を予防しながら経済発展を遂げるための開発の在り方などについて研究を進める。

また、IIについては、まずアフリカを念頭に置き、国際的な課題である「経済成長を通じた貧困削減」に必要な政治・経済条件を分析し、援助する上でどんな開発戦略が有効かを明らかにしていく。アジアの経験を深く掘り下げること、ここでの大きなテーマとなる。援助の在り方の前に、開発の在り方を考えるのが、

COLUMN 援助の経験・知見をアーカイブ化

10月に開発研究所に生まれ変わる東京・市ヶ谷の国際協力総合研修所内にある「JICA図書館」には、事業や調査研究の報告書(ビデオ・スライドなど映像資料含む)や、国際協力を主題とする定期刊行物など、10万タイトル以上の図書資料が所蔵されている。しかしながら、一方で報告書に入り切らない膨大なデータや資料が職員の机の下に眠り、3~5年もすれば廃棄処分されてしまう現実もある。

「このままでは過去の協力を忘れてしまう。組織としての“記憶”を蓄積しなければならない」と加藤さんは危機感を抱く。いわば、“宝の持ち腐れ”状態にある。

そこで開発研究所は、まず職員や事業の関係者から開発援助の経験から得られた情報・知見を集め、体系化し、次世代の実証的研究に役立てられるよう、アーカイブを整備する。「将来、事業を振り返ったときに、何をやってきたのかよく分からないという状況になってはいけない。国際協力の意義を国民に訴える力も弱まってしまう」。

他方で加藤さんは、「JICAの所蔵する資料が“宝の山”とは限らない」と楽観視しない。なぜなら、現在のデータは、プロジェクト目標をはじめ、ある一つの目的に直接結び付くものに限って集めているために総括的でない場合があり、データ自体が必ずしも科学的な検証に耐え得るものであるとはいえないからだ。「研究内容に合わせて改めてデータを取り、集めることは難しいので、通常の事業で得られたデータが、同時に研究に役立ち、さらに次の事業にも生かされるようにしたい。そのためには、業務の一環としてデータを収集できるようにするなど、事業自体の進め方を変えていく必要があるだろう」。

事業の有効性を科学的・現実的に伝えるためにも、経験・知見のアーカイブ化は開発研究所の重要な役割の一つだ。

新 JICA レッスン

about NEW JICA